平成２９年度第２回協働のまちづくり推進委員会議事録

日時：平成２９年１１月１７日（金）１８時３０分から
場所：八街市総合保健福祉センター　３階　大会議室Ｃ
出席委員（１０名）
　伊藤委員、治部委員、新村委員、玉川委員、長谷川委員、松本委員、清水委員、
　松戸委員、霞委員、櫻井委員
欠席委員（２名）
　髙橋委員、石毛委員
アドバイザー
　関谷　昇氏（千葉大学法政経学部教授）
傍聴者なし

１．開会

２．委員長あいさつ

３．八街市協働のまちづくり推進員あいさつ

４．議題
（１）協働のまちづくりＰＲ用リーフレット及びパンフレットについて
（事務局）
　協働のまちづくりＰＲ用リーフレット及びパンフレットの作成過程や印刷製本の概要、活用方法等について配布資料をもとに説明。
（委員長）
　リーフレット等について事務局から説明があったが、ご意見・ご質問はあるか。
（Ａ委員）
　少し文字が多すぎるかなという印象があるが、イラストが入っているしこれくらいは許容範囲かなという気もする。リーフレットもパンフレットも今書かれている文字数が限度だと思う。
　リーフレットの見開き右ページ下の自助、共助、公助の図について、公助が一番上にくると行政が偉いんだという印象を与えかねないので、図を横に倒して左から右に流れるようにした方がいいと思う。また、趣味的な話になってしまうが「まちづくり全体を豊かなものにしましょう」という文章は「まちづくりを豊かにしましょう」でいいのではないかと思う。
　つづいて、リーフレット裏表紙の公園管理サポーターの説明の中で、「公園に対する

より一層の愛着が生まれ」という表現は押しつけがましいので、「公園が身近なものとして考えられる」とか「公園が自分達のものとして考えられる」といったようなサラッとした文章が良いと思う。また、こうみんかんサポーターの説明の内容に、庭園の美化整備の取り組みを追加してはどうか。さらに、「中央公民館での活動」という部分は「中央公民館活動」としてはどうかと思った。

つづいて、パンフレットについて、イラストは「ピーちゃん　ナッちゃん」で良いと思う。文章の内容としては、リーフレットと重複するが８ページの公園管理サポーターの説明の「公園に対するより一層の愛着が生まれ」の表現を改めた方が良いと思う。また、協働の事例を掲載するページで、「協働のカタチ」という見出しをつけているが「カタチ」という表現が少しわかりにくいと感じた。また、事例を４つ掲載する中で、市民活動団体は市民をベースとしていることから、市民と市民活動団体の組み合わせは事例としてわかりにくいので、別の組み合わせに代えた方がよいと思う。

リーフレット等の内容については概ね以上だが、他自治体が作成しているパンフレットの中に、協働の担い手として議会を入れている自治体があった。議会はある意味では行政の執行機関であり、ある意味では市民の代表でもあり、色々な解釈があると思うが、議会の解釈についてこれを機に考えてみてもよいのではないかと思った。

（委員長）

議会の解釈については別の機会に検討できればと思う。これまでに、協働のまちづくり検討会や指針づくりにおいて、協働の中で議会をどのように取り扱うのかについて議論したかと思うが、後程、関谷先生からもアドバイスをいただければと思う。

掲載文章やイラストについて、他に意見はあるか。

（Ｂ委員）

簡単なものであるリーフレットは一般市民でもササッと読める内容になっていると思うが、パンフレットは誰に配布しようとしているのかがわからない。

市民に読んでもらうためには、文字数を多くしたくないという思いや内容を難しくしたくないという思いはあるものの、なぜ今協働が必要なのかということを書かないと市が何を必要としているのかが読み手にはわからないので、協働が必要とされる背景などを書いた方が良いと思う。

（Ａ委員）

まずは見てもらうことが一番で、過去の経緯は色々あるが、リーフレット等の冒頭に記載されている「八街市では、市民をはじめ、区や自治会、事業者、行政など八街市に関わるすべての人々が協力・連携してまちづくりに取り組む協働のまちづくりを推進しています」という一文に、みんなが協力して新しいまちづくりをやっていくんだという

思いが集約されていると思う。
　なぜ今協働が必要なのかという話は、指針や計画、条例に詳しく書いてあるので、リーフレット等で触れる必要はないと思う。

（委員長）
　このリーフレット等を手に取って見たときに、実際に何をやろうとしているのかがわかるものとなっているか。例えば、パンフレットとしてもらったり回覧で回ってきたときに、実際にこれを手に取って読むか。これをもらったときに協働とはどういったものなのかをイメージして、尚且つこれを私があなたに説明しますといったものにならないとダメなんだと思う。
　また、文章はもちろん大事だがイラストも大切な部分であり、例えば、先ほど文字が多いという話があったがイラストという部分で吹き出しを使って物事を簡単に伝えるという方法もある。
　この素案は第１回目の会議での意見を踏まえて、ある程度のかたちを付けたのだと思うが、これは完成形では全然ない。これを手に取った時に実際に自分はどう思うのか、委員の皆さんの率直な意見をお聞かせ願いたい。

（Ｃ委員）
　第１回目の会議を欠席したので、このリーフレット等を作成する趣旨を理解できていない部分もあるが、もしこれを回覧版で見たとすると、何を言おうとしているのかわからないし、どうすればいいのかもわからないというのが率直な気持ち。

（Ｄ委員）
　Ｂ委員の意見に通ずるものがあるが、リーフレット等を開いてパッと見た時に、八街市の目指すまちづくりと書いてあるが、目指すものがわからない。冒頭に課題というワードが３つあるが、課題が何なのかが書かれていないので必要性がわからない。どんなことが課題でどんなことに困っているのか、少しは具体的に見えるものがなければ何を言おうとしているのかわからない。
　「みなさんがもつ知識・技術・経験をまちづくりに活かしましょう」という見出しがあるが、知識も技術も経験もないといった人は無理だということになってしまうので、知恵でもいいし力でもいいが、もう少し柔らかい言葉を使った方が良いと思う。
　こんなこともまちづくりと見出しを付けていくつか具体例を挙げている部分で、要するに花を植えればいいみたいなことを言っているが、道路に面していない家は花を植えても景観づくりにならないのか。また、ランニングをしながら見回り活動なんてできないのではないか。細かく指摘すると、そういったことになる。
　交流や趣味、サークル活動について言及するよりも、一番大事なのは区や自治会に加

入してくださいと呼び掛けることではないか。また、区や自治会へ勧誘するためにリーフレットを活用するということだが、そもそも区が勧誘活動をしていない。活用方法の説明の中で費用対効果の話があったが、作って効果があるものでないと意味がないので、どこで配るのかも非常に大事。

リーフレット裏表紙の市民サポーターの記事について、こうみんかんサポーターの部分で庭園の美化・整備の話があったが、あれはシルバー人材センターが有償で請け負ってやっている。ボランティアでも有償のものと無償のものがあるが、その区別がこの文章を見ただけではわからない。

表紙に「住みよい街を目指して」とあるが、今の街は住みよくないのかということになるので、より住みよいまちづくりとしてはどうか。

（Ｅ委員）

リーフレットとパンフレットの２種類を作成しているが、２種類必要なのか。中身の内容は今、発言があったように色々あり、よく見る人はそういった部分に気付くと思うが、よく見ない人にとっては細かいことはどうでもいいと思う。リーフレット等にそんなにお金をかけられないのであれば１種類でいいのではないか。

中身については細かい話をしても市民はあまり見ないと思うので、なるべく簡潔な内容にして、配布する時に説明しやすいようなものにすべきだと思う。リーフレット等の素案について、問題点を指摘すればいくらでもあるが、そんなことに時間を掛けていないで、すぐに動き出した方が良い。

（Ａ委員）

協働というのはよくわからないけど新しい言葉が出てきたなと、それだけでも読み手の目に留まればいいと思う。全住民が手に取って見るといったことが本当は望ましいが、とりあえず手に取って読んでもらい、興味がある人、疑問点がある人はさらに市役所に問い合わせするなどして質問してもらうということが必要だと思う。予算の問題もあり、使い分けをするためにリーフレットとパンフレットを作成している訳なので、この２つを１つにしてしまうと、ある意味では中途半端になってしまう。

（事務局）

リーフレット等の作成には担い手を増やすという目的があり、それにはまちづくりへの参加について理解を得ることが必要だと思う。リーフレットについては、簡単なことでもまちづくりにつながるんだという意識を持ってもらうためのきっかけ作りに重きを置いて作成した。一方、パンフレットについては、もう少しステップアップして、まちづくりをみんなで協力してやっていくんだというところの手法を、事例などを載せて紹介することで気付いてもらう狙いがある。意識のレベルは人によってまちまちだと思

うので、まずはまちづくりに興味を持ってもらうというところをリーフレットで伝えて、その入り口から入ってきた人に、パンフレットを用いて理解を深めてもらうといったコンセプトでリーフレット等を作成している。当然のことながら、このリーフレット等をどのように活用するのかについても考えないといけない。

（委員長）

活用方法も含めて、これを使って広げていくことを前提に議論しないと、文言やデザインの議論だけで完結してしまう。関谷先生からも話があったが、ＮＰＯ団体ならＮＰＯ団体、消防団だったら消防団、自治会なら自治会の中だけで完結するということではなくて、自治会から違った分野への結びつき、例えばそれは幼稚園や学校かもしれないし、農家かもしれないが、そういったつながりも考慮に入れて話を広げた方が良いと思う。本当に伝えたいことは協働の担い手をつくるということで、この部分を伝えられれば一番良いと思う。

Ｆ委員、そういった意味で、例えば、事業者が会合の中でこのリーフレットを渡すこととなった場合、このリーフレットは読んでもらえるか。

（Ｆ委員）

協働のまちづくりについて、一般の市民に協力を呼び掛けても中々難しいと思う。区や町内会に入らない人が増えてきている中で、そういった人達に協力を呼びかけるには簡単なものが良い。例えば、高齢者にとって健康づくりは重要なポイントだと思う。また、サークル活動に参加してくださいと呼び掛けるのであれば、あまり難しいことは言わず、こういったサークルが沢山あるので自由に参加してくださいと呼び掛けるような内容を主にした方が良いと思う。

（委員長）

Ｇ委員、ボランティアという立場からすると、リーフレットは一番活用している立場なのではないかと思うがいかがか。

（Ｇ委員）

この状況は一遍にこうなったわけではない。今から２０年～３０年前は、区も地域ももっとチームワークが取れていた。今年度の敬老会も雨が降るから中止となったが、せっかく人が集まって色々な懇親を図ろうとしているのに中止になり、他にも市民体育祭も中止となっている。人のつながりがなければ中々難しい問題だと思う。昔は、区や町内会を辞めることは恥ずかしいことだという認識が地域住民にあったが、今は堂々と辞めていくし加入しない人もいる。これはなぜかと考えたときに、コミュニケーションが足りていないと感じる。

（委員長）
Ｈ委員、区長という立場で、このリーフレットを持って行って説明するといった場合、どうか。

（Ｈ委員）
リーフレット、パンフレットともに内容そのものは非常によくできていると思う。
ただし、あまり堅苦しい言葉は使わずに、もう少しフランクな言葉を使った方が良いと思う。市が上からものを言うのではなくて、下から盛り上がってくるような気持ちが必要ではないかと思う。

（委員長）
活用方法という部分で、どなたか意見はないか。

（Ｉ委員）
区の加入率が５０％以下の状況を加味すれば、何らかのかたちで全戸配布すべきだと思う。そうでなければ、末端まで説明しきれない。多くの市民にこういった取り組みをしないといけないと理解してもらって、多くの方々に担い手になってもらうためには、白黒印刷でもいいので全戸配布すべきだと思う。

（事務局）
前回の会議において、カラー印刷でないと中々読んでもらえないといった意見があったので、参考までにカラー印刷で全戸配布した場合の見積もりを取ったところ、リーフレットであれば３５万円、パンフレットであれば５５万円といった金額であった。白黒印刷であれば、インク代はかかるものの、基本的には紙代だけで金額がそんなにかかるものではないので、白黒印刷での全戸配布については今後の検討課題とさせていただきたい。

（Ｈ委員）
余談であるが、先日、八街神社大祭が開催され、お囃子などの競演が市役所駐車場で実施された。どれくらいの観客が集客されているかご存知か。ほとんど宣伝はしておらず、各町内にポスターを掲示しているだけなのに、１，０００人から３，０００人が集客されている。市民が参加できるように仕向けるのがポスターであり、細かいことは必要ないという一例として紹介させていただく。

（Ｂ委員）
リーフレット等を全戸配布したとして、どれだけの人が読むと思うか。

（委員長）

そこが一番大きなポイントなんだと思う。全戸配布については、どういったかたちを採るのかも含めて、今後の課題であると思う。

（Ａ委員）

白黒印刷だと新聞折り込みのチラシですら相手にされないのでカラー印刷せざるを得ないと思う。八街市のまちづくりが転換して新しい手法と考え方でやっていくんだと舵を切ったことを住民に知ってもらいたいが、少子高齢化と言った途端に住民に読んでもらえないと思う。全戸配布してもらいたいという思いもあるが、予算の話もあるので少なくとも回覧は必ずしてもらって、住民の目に留まるようにしてもらいたい。

リーフレットをチラッと見た時に、ふれあい、郷土愛、つながりといった言葉が目に留まるだけでも成功だと思う。全部詰め込もうとすると分厚くなって誰も読まない。

（Ｅ委員）

八街市においてこれから協働のまちづくりを進めていくということは、広報等を通じて市民に伝達されているという認識をしないといけないと思う。

リーフレットは、実際にまちづくりに参加してもらいたいという人に向けて発信するものなので、全戸配布という考え方は少し飛躍し過ぎている気がする。

協働のまちづくりに興味を持った人に渡した時に、きちんと内容が伝わるものにして、興味を持った人を捕まえられるようなものにしたい。興味を持ってない人に渡しても、それは無駄になってしまう。

（委員長）

掲載文章の内容、イラストの内容、活用方法について意見を伺ってきたが、パンフレットに掲載する事例についても意見を伺いたい。パンフレットが本当に必要かというところにも行きつくと思う。Ａ委員からも意見があったとおり「協働のカタチ」という言葉自体がどうなのかということはあるが、パッと見て視覚的に入ってどのような活動が協働なのかが見えるのは見えると思う。事例として、行政と市民であったり行政と事業者という部分は行政の方で把握していると思うので、市民と市民、市民と事業者、市民と市民活動団体が連携している事例について、挙げていただきたい。

（Ｅ委員）

関谷先生の話を聞いてから環境ボランティアをすぐに立ち上げた。立ち上げたというと聞こえはいいが、地域の人達の集まりでやっている。そうすると次の段階に進みたいということで、東吉田に色々な人達に来てもらうために、綺麗にしたい、花をいっぱいにしたいということで活動に発展する。人が集まればモノが動き、モノが動けばお金が

動くといったように循環が出来上がる。１つの成功例をつくれば、他にもやってみようという機運になってくる。事例として、この地域で実際にこういった活動をしているといった実例を挙げれば、その地域に関係する人は集まってくると思う。

（委員長）

Ｅ委員が取り組まれている環境ボランティアは、環境だけでなく、子供たちが集まり、高齢者の憩いの場にもなっているといった意味では、サロン的な機能も果たしており、まさしく協働の事例だと思う。

（Ｅ委員）

これから活動が進歩していくと区やボランティアなどと相談したいことが色々と出てきて全部絡んでくる。この委員会は非常に大事な人達が委員として参加しているので、もう少し主体的に意見を出していただきたい。

（委員長）

例えば、農家の方が保育園へ出向いて、その場で農産物を子供たちと一緒に調理するのも協働の１つのかたちであり、全く違う分野が結びついている。今年から大々的に開催した落花生まつりも商工会議所や市、市民も賑わいを創設しようと動いている。

行政については協働の事例を考えやすいが、市民と市民であったり市民と市民活動団体であったりについては、我々の方から事例を挙げないと行政は中々把握していない部分もある。

Ｃ委員はＰＴＡという関わりの中で色々な分野につながっていると思うが、そこから発想するつながりについて提言いただければと思う。

（Ｃ委員）

南中学校区は地域に密着した学区であり、川上小、二州小、交進小が教育後援会という団体を組織して、寄付金はもとより子供達の見守り等を実施している。

教育後援会には区長をはじめとする地域住民や民生委員、議員等も含まれているが、川上小のバザーに参加していただき、じゃがバターやチョコバナナ等の売上金を寄付していただいた。また、ＰＴＡ、学校、教育後援会が主催者として運動会を実施している。小学校区関係では連携をとることが多々ある。

（Ｈ委員）

リーフレット等とは別に広報やちまたに記事を掲載してみるのも１つの手段だと思う。

（Ｃ委員）

リーフレットは協働のまちづくりについて市民へ呼びかけるもので、パンフレットは具体的にこういった団体がボランティアをやっているんだと示すことで参加を促すようなものなのか。

（委員長）

１つの情報ツールとはなるが、協働には色々な入口があるので、それを入れ込むことによってこれも協働なんだなと市民に理解していただくようなものにしたい。

（Ｈ委員）

市民は協働が何なのかを理解していないし、どんな取り組みをしているのかも理解していないので、まずはアピールする必要性があると思う。

（Ｃ委員）

リーフレットでは、シンプルに協働のまちづくりを進めてますよ、パンフレットでは、こういった団体が活動してますよというような構成の方がわかりやすいと思う。

（Ａ委員）

キョウドウというと農業協同組合の方の「協同」を連想して、「協働」は字が間違っているのではないかと市民は疑うと思う。しかし、この字が違っている点が非常に重要な意味をもっている。八街市で新たに取り組んでいるまちづくりは、「協同」ではなく「協働」であり、ともに働くということだけでも市民に理解してもらえれば良いと思う。

（委員長）

キョウドウという言葉を使うと一般的には協同組合の「協同」を連想して、ともに働くといったイメージが沸かないので、パンフレットといったかたちで言葉の違いも含めて周知していくことは大切だと思う。

ここまで議題（１）①から④まで議論してきたが、時間が押している中で関谷先生のアドバイスの時間を長く取りたいということもあるので、議題（２）について本日は議論しないこととしても差し支えないか。

（事務局）

これから先、サポートセンターの設置について検討していくにあたって、詰めていかなければならない検討項目がかなりあったため、まずはとりまとめたものを報告させていただくといった趣旨なので、その点を理解いただければ議題（２）を省略しても差し支えない。

（委員長）

関谷先生の率直な意見と、我々がやらなければならない点についてアドバイスをいただければと思う。

５．八街市協働のまちづくり推進員による総括・アドバイス

（推進員）

皆さんの議論を伺っていて、基本的に同じ印象を持っている。今回、色々な自治体のパンフレットをみていて率直な印象というのは、行政がとにかく協働を進めていきたいといことが前面に出ていて、目線が行政目線になっている。情報というのは発信する側と受け取る側がいるわけで、受け取る側のことをどれくらい考えたパンフレットなのかというと、あまり考えていないのではないかという印象がある。情報を受け取る側の目線で協働を発信、共有していけるかどうかが根本的なところで大事なところである。

そういった意味では参加者目線で、これからまちづくりに参加しようと思っている人やまちづくりへの参加についてよくわからない人も含めて、その目線で協働ということを受け止めてもらえるかどうか。そのためには、問題状況などこれからどのような状況になってしまうのかを導入部分に入れる必要がある。もう１つは参加のイメージを膨らませていくということ。この２つが非常に大事だと思う。

１つのポイントとして、高齢者支援ということを念頭に置きながら話をする。高齢者支援というのは、これからどんどん高齢化社会が本格化していき、６５歳以上が４人に１人から３人に１人、千葉県ではその街の半分以上が６５歳以上で占められる。そういう時代にきている中で、マイナス面とプラス面がある。マイナス面ということでいうと、例えばどんどん税収が減っていく一方で、社会保障は逆にどんどん増えていき、負担が若い人達に向かっていく。こういうことを問題として抑えておくだとか、孤立化する高齢者の方々が増えてくるだとか、消費量が減っていくから街の経済の勢いが削がれていってしまう。民間サービスがどんどん撤退していってしまうだとか、自治会の担い手が減って行ってしまうといったように、高齢化社会において、今後予想される具体的な現象をイメージしてもらうために前段として何らかのかたちで表現できるといい。マイナスの面がある一方でプラスの面もある。高齢化社会といいながらも元気なお年寄りがたくさんいる。そういう方々が地域で活躍することによって、もっとできることが沢山あるはずなんだと訴えかけてはどうか。高齢者の方々は地域においては色々な意味での力なんだと。そういったプラスの面とマイナスの面を併せて、これからは協働型の地域社会をつくっていくんだと。そのためには、色々な世代がつながり、色々な分野がつながっていく必要がある。そういったことを通じて支え合いをつくっていく。高齢者の方々が活躍できる場をつくっていくだとか、生き生きできる地域社会を作っていくんだと。こういったことが、なぜ協働が必要なのかを説明するにあたっての１つの導入部分になる。

では、協働って何なの、協働ってどうやってやればいいのと言ったときに、参加者目線

でイメージしてもらわないといけない。

例えば、高齢者支援ということを念頭に置いたときに、子供達に何ができるのか。それはおじいちゃん、おばあちゃんと話をしようよと。核家族化が進む中で、おじいちゃん、おばあちゃんと話をする機会が中々ない。子供達にできることは、おじいちゃん、おばあちゃんの話を聞こうよと、困っていることを聞こうよと。それでいいと思う。そういったイメージを描いてみると良い。

あるいは、現役世代にどんなことができるのか。例えばＩＴ関係の仕事をしている人だったら、地域で色々な活動をしている人達のために、ＩＴ関係で身に付けている知識や技術を用いて、ブログの開設やチラシ作りといったところで応援しようだとか、高齢者の見守り活動を１月に１回でいいからやってみようだとか。

あるいは専業主婦の方であれば、自分が学んでいるお花や踊りなどの趣味活動を見せることが高齢者支援につながる。そのように考えると主婦や趣味活動をされている方々にとって協働のイメージを膨らませることにつながる。

それぞれの世代にどんなことができるのか、イメージを膨らませるような情報を掲載すると良いと思う。

今、世代ということを申し上げたが、立場や団体の視点でどんなことができるのかいくつか例を挙げる。

例えば、ＰＴＡと学校でどのようなことができるのか。私が関わっている地域では学校主体で人材バンクをやっている。学校の家庭科の授業で裁縫やミシンを教えてくれる人を募集したり、放課後に昔ながらの遊びを教えてくれる人を募集している。そのようにすると、学校で子供たちと高齢者の方々が相交わり、子供たちにとっても刺激になるし、高齢者の方々にとってもふれあいの場、生きがいを持てる場になっていく。また、中学校であれば、部活動をしている子供たちが自分たちの部活動を高齢者の方々に見てもらうのでもいい。あるいは、一人暮らしをしている高齢者の方々を学校に招待して給食を一緒に食べることだって１つの協働といえる。そのようなことから、学校とＰＴＡが連携してできることを考えてみようという話に広がっていく。

あるいは、八街で事業をされている商工関係の方々であれば、例えば町中の居酒屋に寄附付き商品をつくってもらう。ビール１杯５００円とすれば、５００円のうちの１０円とか２０円を高齢者支援のための寄付にしましょうと。こういった商品を色々な店がつくっていったら、この街のためになるんだから寄附付き商品を買ってみようかなという話になってくる。中々具体的に活動することができない人でも、ビールを飲むことで貢献できるのなら、これは面白い。このように事業者が連携してやってみるのも協働としての参加の１つの入口になる。

あるいは市内外の若者たちに向けて高齢者のための起業をしてみませんかと投げかけてみる。そうすれば色々なアイデアを持っている若者たちが集まってくる。

あるいはボランティア活動をされている方々であれば、例えば環境保全活動と高齢者

の健康づくりを結びつけて考える。環境保全活動は一見すると高齢者支援と関係ないように思えるが、どうぞ健康づくりのために我々の活動に参加してくださいといった裾野の開き方だってある。

例えば子育てサロンや子育て支援をされている方々も、その世代だけで集まっているのではなくて、高齢者の方々から子育てのノウハウや子育ての苦労などを学ぶといった切り口で交流活動をやってみてもいい。あるいは子供を預けるといったときに、最近の子育て世代はおじいちゃんおばあちゃんにあまり預けたくないといった人達が一定数いる。それは子育ての感覚が違うからであり、ミルクの与え方や抱っこの仕方は世代によって見方が違っている。だったら子育て世代がおじいちゃんおばあちゃんと交流して、今はこうなんだということを伝えてあげれば、心置きなく子供を預けられるようになる。

このように色々と考えていけば、それぞれの世代、それぞれの団体や活動ができることについてイメージを膨らませることができる。パンフレットを通じて、そういったことを伝えていくことが大事だと思う。

今申し上げたことは、例えば「高齢者支援」というワードを中心に書いて、この世代だったらこんなことができる、この団体だったらこんなことができるといったことを色々と書いてみて、それを見ることによってイメージを膨らませる。要するに参加者目線でイメージが膨らむパンフレットでないと意味がない。

第一弾としてイメージを膨らませる。どうしても、できることがないんじゃないかとか、活動に携わると犠牲が伴うんじゃないかといった固定観念が非常に強いので、それを少しでも払拭できるよう、こんなことでも参加なんだ、こんなことでも協働なんだとイメージを膨らませるパンフレットが必要なんじゃないかなと思う。

パンフレットにおいては全体のイメージを持ってもらう。色々な人達が色々な動きをするんだなと知ってもらうことによって、皆がそういったかたちで動いていくのなら私もやってみようかなとやる気を起こさせるような効果も表現の仕方によっては期待できる。パンフレットはそのようなイメージで捉えることが大事。

一方でリーフレットについては、例えばターゲット別にいくつか作ってみる。子供たち向けのリーフレット、働いている人向けのリーフレット、事業者向けのリーフレット、高齢者向けのリーフレットといったようにターゲットを定めて、そこから何ができるのかイメージが膨らむようなものにしてみるといいと思う。

パンフレットとリーフレットを抱き合わせで各方面へ配布しながら、それぞれＰＴＡだとか商工会だとか自治会といった色々な集まりの場で配布して、イメージを膨らませてもらう。ターゲット別リーフレットがあれば話を膨らませやすい。

いずれにしても、他の自治体が作成しているようなパンフレットは内容が堅過ぎるというところがあるし、何よりも連携のイメージが沸かない。これは市民だけでなく職員も連携するイメージが膨らんでいないので、これから浸透させていかなければならない。

高齢者支援の担当部署が、色々な切り口や色々な角度の引き出しを持っていなければ、

各方面に働きかけていくことができないので協働になっていかない。そういった意味ではパンフレットで伝えていくことは市民のみならず役所にも必要。双方が固定観念を払拭し、色々なアイデアを膨らませていくことが必要。

１つのパンフレット、１つのリーフレットに色々な情報を一気に載せるのは中々難しいので、予算の関係もあると思うが第１弾、第２弾と作っていって、然るべき所には全て見れるようにしておけば色々な人達の目に留まると思う。まずは協働のイメージを喚起していくようなものを作り、その上で然るべきときがきたら、更なる連携を促していくような内容にブラッシュアップしていけばよいと思う。

（委員長）

すごく胸にストンと落ちて、なるほどなと思った。私の立場上、行政目線のものは見たくないとは言いたくなかったが、当事者である我々市民の目線で書かれたものでないとどうしても違和感があり、読みたくなくなってしまう。これを回覧で回したところで、ゴミ箱行きになってしまうだろうというのが正直なところであり、関谷先生からアドバイスがあったとおり、ターゲット別であったりとか１回だけでではなくバージョンアップしていくかたちが協働を広げていくことにもつながると思うので、予算上の問題もあると思うが、関谷先生のアドバイスを踏まえて我々委員ももう一度活発に議論するので、事務局も頑張っていただきたい。

（Ｂ委員）

関谷先生の話を聞いて今までわからなかったことがわかった。それは回覧であっても全戸配布であっても行政側の熱が薄い。市の職員が色々な場に出向いてこれが必要なんだと熱を込めて語ってもらいたい。それは大変なことではあるが、そうすることで必要性が伝わる。

（委員長）

行政も協働についてまだまだ理解がないということが、現在作成中の八街健康プランを見るとわかる。協働の視点がないのが非常につらい。それを見るだけでも行政の今の立場はまだまだ足りないというのが率直な意見。

（Ａ委員）

事務局が作成した素案が他人事だと言われるかもしれないが、今ようやくスタートラインに立った。条例も作ったし指針も作ったし、計画も作ったということで体制が出来上がった。そういうことをやってきたよと公に知らせるためにパンフレットを作成して市民に知らせる。これもやっぱりやらなければいけない。これからどのように行動展開していくのか。その中の１つが市民活動サポートセンター設置の問題だと思う。アクシ

ョンプログラムをどのようにするのか。そのアクションプログラムがこれからの協働のまちづくりの決め手になると思う。これから協働のまちづくりの始まりなんだということで、そういった意味では１００点満点をとれなくても、それなりの旗揚げができていればいいのではないかというくらいに考えてみてはどうか。せっかく良いものを作っているのに貶(けな)すなよと怒られてしまうかもしれないが、そういう気楽な感じでバージョンアップしていけばいいのではないかと個人的には思っている。

（事務局）

時間がだいぶ押しているので閉会としたい。

次回の会議は２月６日（火）を予定しているので、スケジュールの調整をお願いしたい。

（委員長）

本日の会議を踏まえて、リーフレットとパンフレットはどういったかたちで、委員に示されるのか。

（事務局）

本日いただいた意見を踏まえて、素案を修正した上で、デザイン等を含めてきれいに製本したものが出来上がった段階で、書面開催というかたちで再度ご意見をいただいて最終的なものを作り上げていきたいと考えている。

（委員長）

最終的な原稿にする前に委員へ提示していただきたい。

関谷先生にアドバイスをいただいた中で、今回の素案はイメージしていたものと違うなと感じている部分が委員にもたくさんあると思うので、事務局側の考えを再度いただいた上で、それに対して我々が再度お返しするといったかたちにしていただきたい。

（事務局）

本日いただいた意見を整理して、骨格のようなものができた段階で委員のみなさんへお示しした上で、印刷業者へ発注するような流れでやっていきたい。

（委員長）

是非そうしていただきたい。我々市民の目線が反映されていないとパンフレットを見ても連携へとつながっていかないと思うので、そこだけは大事にしたい。

（事務局）

そのための委員会なので、いただいた意見はなるべく反映させられるように色々と考えて良いものをつくっていきたい。

（委員長）

委員の皆さんも大変だと思うが見ていただいて、できるだけコメントをいただけるようにお願いしたい。

（事務局）

以上をもって閉会とする。